

第 31 回甲南英文学会研究発表会レジュメ

[英米文学・文化部門]

* 研究発表

言語と人種のハイブリッド性

——Richard Rodriguez と Luis Alberto Urrea の場合

大森義彦 (甲南大学)

司会 秋元孝文 (甲南大学)

メキシコ系二世の Rodriguez は、2002 年にエッセイ集 *Brown: The Last Discovery of America* を出版した。そしてそれを自ら三部作の完結編と呼んだ。その出版前後から彼の著作に対する評価に変化が見え始める。「メキシコ系としてのエスニシティを否定する保守反動の異端児」だった彼を、「アメリカのモンテーニュ」と称揚する声も今では聞こえてくる。作品のタイトルそのものになっている brown は、通常ヒスパニック/ラティーノを表す言葉であるが、Rodriguez はそれを異種混交全般と、それが生み出す混濁を表すメタファーとして用いている。その狙いは、いまだ白と黒という二分法から自由になれずにいる「アメリカの人種概念を突き崩す」(“undermining the notion of race in America”) ことであった (Rodriguez は、バラク・オバマが、当のオバマも含むアメリカ人一般に黒人とみなされていることに不満を表明し、“Obama is brown.”と主張したことがある)。

加えて、Rodriguez によって修正を施され意味の幅を広げられたいわゆる “The Browning of America” は、言語の領域にも及ぶものとなっている。スペイン語に限らず他のさまざまな言語を取り入れたアメリカ英語も混濁 (“impurity”) の度合を高めていて、もはや American Language とでも呼ぶほかなくなりつつある。H. L. Mencken に賛辞を呈していることから窺えるように、Rodriguez は、このような言語の browning も、人種のそれと同様に、肯定的に受け入れようとしている。最近の批評の動向を視野に入れて、*Brown* を中心とする Rodriguez の作品について再考する。

そのうえで Urrea (ウレア) である。彼はティファナ生まれでサンディエゴ育ちの作家・エッセイスト・詩人。1998 年に自伝的エッセイ集 *Nobody's Son: Notes from an American Life* を出版している。この中で彼が述べていることには Rodriguez のそれと共通するものが多いのだが、なによりもまず、Urrea 自身が Rodriguez 言うところの brown を体現する人物だという事実がある。父は

メキシコ人で母は東部出身の白人なのだ。メキシコ人あるいはメキシコ系であるというだけでも、Rodriguez がそうであるように、メスティーソ（混血）の可能性が高いことを示すわけだが、Urrea の場合はハイブリッド性、雑種性の度合いがさらに高い。作中では、単にメキシコ人×白人という割り切り方ではすまない血筋の複雑さが明らかにされ、エスニック・アイデンティティをどこに求めるかは容易ではない。

Urrea がそのようなデラシネ的出自を受け入れて、“American”として生きていることは、作品のタイトルにも表れている。エスニック・アイデンティティを求めたりはしない、と公言する Rodriguez とつながる。そして、自分自身の雑種性と重ねるかのように、Urrea はアメリカ英語がいかにかハイブリッドな言語であるか、どれほど他言語を取り込み内包しているか、実例を挙げて示してみせる。それは、Brown のなかで Rodriguez がアメリカ英語の特徴を説明するのに“omnivorous”（雑食性の）という形容詞を何度か使っていることに通じる。

両者の間には微妙な相違点もある。その相違点にも留意して二人の作品を比較考察する。

*ワークショップ

「文学・文化を教える」

青山義孝（甲南大学）

中島俊郎（甲南大学）

安武留美（甲南大学）

沖野泰子（甲南大学非常勤講師）

文部科学省が人文社会系学部の廃止や変換を含む検討を求めています。社会に必要とされる人材を育てられなければ、廃止や分野の転換を迫るのだそう、特に教員養成系や人文社会科学系学部・大学院は、組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換することを求めています。ただし今のところは国公立が対象ではありますが、やがて私立もターゲットになることは必至です。

ざんぎり頭を叩いて見れば文明開化の音がしたのは明治4年のことでしたが、一世紀半後の今、果たしてどんな音がしているのでしょうか。文部科学省が力を入れようとしている自然科学の世界では、仮説を立ててその仮説を証明することに、それこそ昼夜分かたず心血を注いでいるわけですから、自然科学の進歩を支えてきたのは想像力のはずです。しかもスキル人間はもう必要ない、21世紀型知識人に求められているのは教養である、という声もひところは聞こえてきていました。21世紀は文科の時代かと思いきや、残念ながら文科の時代と

は逆の方向へ進み始めているように見えます。

全国の大学で英文科の退潮の音が聞こえてきます。そんな中で、普段の授業で凝らしている工夫並びに苦労話を披露させていただくことを口火に、「文学・文化」を教える意義なり意味なりを、フロアと一体となって考えてみたいと思います。

[英語学部門]

* 研究発表

法助動詞としての *Do* の再分析—強調文・命令文を証拠として—

乾 拓也 (甲南大学大学院博士後期課程)

司会 福島彰利 (甲南大学)

現在の生成文法理論では、英語における助動詞 *Do* は「意味的に空 (semantically empty) であり、最終手段の原理 (Last Resort Principle) に基づいて挿入される」とされている (Chomsky 1989, 1991, 1995)。しかしながら、この *Do* が「意味的な要素である」かのように思える例が存在する (1)。

(1) a. I DID go to school yesterday. (emphasis)

b. Don't leave me alone! (negative imperative)

Chomsky の説明では、「*Do* は、時制接辞 Tense を満たすためにその主要部に直接挿入される (Do-support)」とされている。しかし、(1a) では時制接辞は直接本動詞によって満たさせるにもかかわらず、*Do* が適用されている。一方 (1b) では、時制による屈折が起こっていないため、接辞は満たされる必要がないにもかかわらず、*Do* が生じている。これを説明するには、Chomsky の分析ではいささか不十分である。

事実、「強調の *Do*: emphatic do」は、詳細には議論されてこなかった。先行研究として、Radford (2004) は、独自の統語範疇として、EMPHP (Emphatic Phrase) を設けている。また、Duffield (2013) は、「強調は断定 (assertion) を表現する」とし、独自の範疇として AsrP (Assertion Phrase) を設けている。命令文における *Do* にいたっては、Chomsky 自身はほとんど言及していない。また、一部の先行研究 (c.f. Potsdam 2007, Rupp 2007) では、don't は命令文において独自の否定構成要素であり、単一の語彙項目として挿入される、としている。

興味深いのは、強調・命令の *Do* は共に、法助動詞 (modal auxiliary, modals) と共起しないことである (2)。これは統語的な問題というより、意味的な問題であるともいえる。

(2) a. *I DO can come. (Quirk et al. 1985: 137)

b. *Don't must go outside!

この事実から、助動詞 Do はすでに何らかの意味を含んでいるため、法助動詞とは共起できないと考えられる。さらに(1)、(2)の事実から Do は mood sentence に現れることがわかる。

本発表では、これらの例について、助動詞 Do は特定の意味（強調、命令を表し、「意味的に空ではない」と主張する。さらにこの Do は、Modality を示す語彙要素であり、他の助動詞と同様に、文に基底生成されるものと分析する。

*ワークショップ

「周辺構造を巡って」

福田 稔（宮崎公立大学）
中村 浩一郎（名桜大学）
北峯裕士（北九州市立大学）
古川 武史（福岡工業大学）

概 略

Rizzi (1997)は、談話に関わる概念を節の左周辺部(Left Periphery)に関連づけて、詳細な構造分析(Cartographic Approach)を提案した。これまでは主節の構造分析が中心であったが、本ワークショップでは、主節の左周辺部以外の構造分析を扱う。

本ワークショップでは、初めに福田が概略を述べ、福田、中村、北峯、古川の順で発表し、質疑応答へと移る。

発 表 要 旨

① 英語の後置詞について

福田 稔

Aarts (2011)と Huddleston and Pullum (2002)は、限定的ではあるが、英語にも後置詞として分類される単語があると指摘している。(1)の構造表記はAarts (2011)による。

(1) a. [PP [NP College work] *aside*], I have just ended this strange relationship with

the girl we spoke about in Paris.

b. [PP [NP These objections] *notwithstanding*], they pressed ahead with their

proposal.

c. [PP [NP Seventeen years] *ago*] I met a young man called Nat David Schwartz.

本発表では、後置詞句として分析される統語構造は、現在分詞あるいは過去分詞を欠いた「擬似独立分詞構文」であり、後置詞によっては、文法化が進み副詞句や前置詞句となっている場合があると論じる。例えば、(1a)でPPと記された統語構造は定形動詞を欠く小節（に相当する構文）である。

(2) [sc [College work] [aside]]

(1b)と(1c)の事例は、歴史的に独立分詞構文から発達した構文と考えられているが、(1b)は独立分詞構文の性質を残し、(2)と同様に分析される（(3)を参照）。*notwithstanding* は現在分詞であったが、副詞や前置詞（(4)を参照）としても用いられている。

(3) [sc [these objections] [notwithstanding]]

(4) [PP [P notwithstanding][NP these objections]]

これに対して、(1c)は文法化が進み、*ago* は副詞句の主要部として機能し、指定部に度量句があると分析する。

(5) [AdvP [Measure Phrase *seventeen years*] [Adv *ago*]]

(2)から(5)の事例は、後置詞以外の要素を *wh* 疑問詞に置き換えることができるか否かという点で容認性に差が生じる。これは節の随伴移動はできないが、副詞句や前置詞句の随伴移動は可能であるという統語的な差異を反映していると考えられる。また、本発表では、指定部に名詞句や度量句が生起する理由と、節における後置詞句の統語位置を関連づけて分析する。

② 英語補文内の Topic-Focus 構造について

中村浩一郎

英語の Topic-Focus 構造に関して、Gundel (1974)以来、様々な研究がなされ、多くの成果を挙げている。Gundel (1974)は以下の(1a,b)を Topic-Topicalization, Focus-Topicalization として区別している。

(1) a. John He CALLED.

b. JOHN he called.

本発表は、Rizzi (1997)などのカートグラフィー分析に基づき、

Topic-Topicalization を Topic、Focus-Topicalization を Focus 移動と再分析する。更に、これらの現象が補文内にも見られることを示し、英語の補文内にも Topic-Focus 構造を想定する必要があることを示す。

まず、Culicover (1991)は Gundel (1974)に従い、Topic(2a,b)と Focus(3a,b)を以下のように区別する。

- (2) a. To Robin, I gave a book.
- b. On the table. Lee put the book.
- (3) a. TO ROBIN I gave a book.
- b. On the TABLE Lee put the book.

つまり、Topic 要素はコンマで区切られる一方、Focus 要素には強勢が置かれる。また、Topic、Focus が共起する場合、Topic-Focus の順で生じる。

- (4) a. This book TO ROBIN I gave.
- b. Last year in ST. LOUIS we were living.

このような例は、英語でも Topic Phrase (TopP), Focus Phrase (FocP)を想定する必要があることを示唆する。

更に、本発表では、以下の(5a,b)のような否定辞前置(Negative Inversion, NI)もフォーカス移動として扱うべきであることを論じる。

- (5) a. Not a single person did I see.
- b. Over nothing did she make a fuss.

次に、Hooper and Thompson (1973)を概観し、補文内で NI などの操作が容認される動詞の種類についても述べる。その上で、そのような操作を統語的に分析した Authier (1992), Watanabe (1993), Koizumi (1995)などを紹介し、その問題点を指摘し、補文内に Topic-Focus 構造を想定する必要がある、との結論を導く。

③ 談話連結された *wh* 句の優位性効果の欠如について

北峯裕士

下の(1a,b)に見られる文法性の差は、従来、GB 以前の Chomsky(1973)における優位性条件、GB においては ECP 等、さらに、MP の初期における最短距離移動等によって説明がなされてきた。特に、(1b)の非文法性は、優位性の効果が明らかに現れている。

- (1) a. Mary asked [who_i [t_i read what]]
- b. *Mary asked [what_j [who read t_j]]

しかし、次の(2)における例文では、優位性の効果が現れていない。

- (2) a. Mary asked [which man_i [t_i read which book]]
 b. Mary asked [which book_j [which man read t_j]]

Pesetsky(1987)では、下の(3)における *which book* の問いに対する妥当な返答は、話し手と聞き手が共通して覚えている「本」の中から答えなければならず、もし聞き手が話し手の考えている文脈を知らないのであれば(3)の問い自体が変な発話になってしまうと述べ、(3)や上の(2)の例文における *wh* 句を談話連結された *wh* 句と呼び、移動していない談話連結されている *wh* 句は LF 移動の適用外として、(2)の優位性効果が出ないことを説明している。一方、(1)における *who*、*what* 等の疑問詞には、そのような話し手と聞き手が共通認識しているという条件が要求されず、談話連結されていない *wh* 句と呼び、談話連結されていない *wh* 句には LF 移動が適用され、その結果、NPC(Nested Dependency Condition)等の違反が生じるとしている。

- (3) Which book did you read?

このように、Pesetsky の(1)と(2)の優位性効果が現れるどうかは、移動している *wh* 句ではなく、移動していない *wh* 句の問題であり、移動していない *wh* 句が談話連結しているかないかの違いで、そのような *wh* 句が LF 移動するかしないかが決定されるとする。確かに GB においては、Rizzi(1991)の相対化最小条件が出るまでは、このような分析があっただろうが、そもそも、(1b)における *what* も(2b)の *which book* も統語上同じ位置から移動が生じている。LF 以前の統語構造で、なぜ(1b)の移動が許されず、(2b)の移動が許されるのかを全く説明していない。さらに、現在の MP 枠組みでは、上記の NPC 等認められるものではない。このような観点から、本発表では、同じ統語上の位置から移動した(1b)の疑問詞 *what* は許されず、(2b)の *wh* 句 *which book* の場合は、許されるのか、考えて行きたい。

④ 名詞句からの外置とラベルシステム

古川武史

名詞句からの外置の現象(1)は、生成文法の研究において長年研究されてきている。

- (1) a. I read a book yesterday about linguistics.
 b. I saw a boy yesterday that I didn't know.

統語論において、この現象には主に二つの提案がある。一つは、右周辺部すなわち文末への移動が関与するという(右方)移動分析である。

- (2) a. I read [_{DP} a book t_{PP}] yesterday [_{PP} about linguistics].

b. I saw [_{DP} a boy _{t_{CP}}] yesterday [_{CP} that I didn't know].

もう一つの提案は、外置要素は、移動ではなく、文末に直接導入され、被修飾要素と何らかの解釈規則により関連づけられるという基底生成分析である。

(3) a. I read [_{DP} a book] yesterday [_{PP} about linguistics].

b. I saw [_{DP} a boy] yesterday [_{CP} that I didn't know].

(2)のような右方移動分析を採用するならば、左方移動の局所性・境界性の違い、右方移動の随意性、移動を駆動するものは何か、構造上どの位置へ移動し、また、なぜその位置へ移動しなければならないのかなど、右方移動の特異性について原理的な説明が必要となる。

外置要素は、**Internal Merge**すなわち移動ではなく、**External Merge**によって文末に導入されるとする分析を採用すると、外置要素とその被修飾要素はどのようなメカニズムによって捉えられるかを説明しなければならない。

どちらの分析を取るにしろ、名詞句からの外置が示す左方移動の特質との類似点や相違点に対して、例外的な扱いをせず、自然な説明がなされなければならない。

さらに、近年の Chomsky(2014)の主張によると、**Internal Merge**、**External Merge** どちらも同じ単一の **Merge** という操作であるとし、**Merge over Move** は、ラベルシステムの想定により導き出せ、破棄することが可能となる。**Merge** という単一の操作が自由に適用され、その結果構築された構造は **transfer** や解釈 (**interpretation**)のために **phase** レベルで評価(**evaluate**)される。この Chomsky の想定が正しいならば、外置要素は、**phase** 単位で被修飾要素と適切に関連づけられなければならないことになるが、特別な規定を設けずに名詞句からの外置の自然な分析が可能かどうか、検討の余地があると思われる。

本発表では、名詞句からの外置の特質が最近のミニマリスト・プログラムの枠組、ラベルシステムのもと、どのような説明が可能かを検討し、この現象の新たな分析を提案したい。